

### 【1. 概要】

- ・収量回復のため、いちょういも栽培において弱毒ウイルスを活用し、本病を効果的に防除
- ・29戸1.7ha全ほ場で「弱毒ウイルス保有種いも」を導入(平成21年比515%増、産地における普及率は100%)

### 【2. 実践内容】

#### (1) 取り組みの背景、経緯

- ・本病はアブラムシ伝搬及び種子伝染するウイルス病であり、アブラムシの防除やウイルスフリー種いもの導入では、十分な防除効果が得られず、大きな減収となる(図1)
- ・減収性の低い弱毒ウイルスを探索・選抜し、予めウイルスフリー種いもに感染させた「弱毒ウイルス保有種いも」を導入し、収量確保に取り組んだ

#### (2) 普及拡大に向けたポイント、成功要因

- ・「弱毒ウイルス保有種いも」の種苗供給体制を構築  
⇒農林総合技術センターが原々種を生産・保存→JAが農業公社に原種を生産委託→委託農家が種いもを生産→JAが全量買取
- ・H18年に種いも増殖を開始し、H21年に一般農家へ配布開始後は、「弱毒ウイルス保有種いも」を自家増殖して継続的に使用

### 【3. IPMの推進による効果、得られた経験】

- ・「弱毒ウイルス保有種いも」の使用により、単収が回復(JA共販単収:H19年180kg/10a ⇒H26年259kg/10a(図2))
- ・H25年の種いも調査では、「強毒ウイルス」は検出されず、感染防止効果が継続的に発揮されていることを確認



図1. 弱毒ウイルス保有種いもと慣行種いもの形状の差

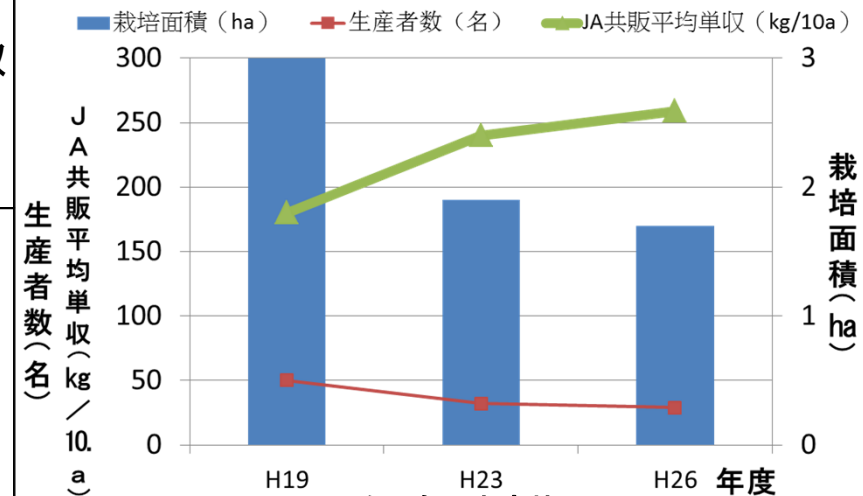


図2. いちょういもの生産状況